



この国の外れに小さな町がありました。
そこにトートという小さな男の子が住んでいました。
でもトートは窓の外を見ながら、は～あ、と、ため息ばかり。
いつもなら十二月になるとうんざりほど降る雪が、今年は何故か降らないのです。
雪が降らないとどうしてトートがため息をつくのかって？
それはね、トートはサンタクロースの心配をしているのです。
サンタクロースはそりに乗ってくるでしょう？ そりは雪がないと滑らないのです。
このまま雪が降らなかつたら、サンタクロースはトートのところに来られないかも知れないのです。

雪が降らないのは、「ダントウ」のせいだと大人は言います。そうになると南の風がいつもよりも強く吹いて雪が降らないのです。

町の大人達は雪が降らないことを喜びました。
雪が降ると仕事はかどらないんですもの。煙突掃除のトムは、
「雪がないから大助かりさ！」
なんて言ってましたし、キャンディーの屋台をやってるスージーも、
「雪がないからお店を毎日出せるわ」
と、にこにこしていました。

その「ダントウ」がどんな姿をしていてどんな力があるのか、トートには判りません。でも、それが雪の邪魔しているなら、ボクがやっつけちゃうのに、と、思っていました。

トートは寝る前におかあさんにサンタクロースの絵本を読んでもらいながら、毛布のはじっこをぎゅっと握りしめていました。

隣のベッドではカーサが眠っています。
「ねえ、おかあさん。サンタクロースは本当にくるかしら」
するとおかあさんは優しいお顔で言いました。
「ええもちろん来ますとも。トートとカーサがおかあさんのお手伝いをしてとてもよい子でいれば必ず来ますよ」
「本当かしら？」
「ええ本当ですよ。さあさあ、もう寝る時間ですよ。明日も早く起きて水を汲むお手伝いをし
てね」

「はい、おかあさん。おやすみなさい」

そう言っておかあさんのために目を閉じました。そうしないとおかあさんはずっと枕元になくてはなりません。

「おやすみなさい、トート」

おかあさんはそう言うと、ランプを消して部屋を出ました。

でも、トートはどうしても眠れません。

おかあさんは「よい子にしていれば必ず来ます」と、言ってくれたのですが、本当かしら。サンタクロースは困らないかしら。

その時、トートは森にいる魔女のことを思い出しました。それはそれはいたずら好きの魔女で、たまに町に来て売り物のお菓子に口を作って「わたしを食べて〜」って、歌わせたり、物干し竿を天まで伸ばしてしまってお洗濯を干そうとした奥さんを困らせるのです。そんなことをするので、雪を隠したのはきっと魔女です。

このままサンタクロースが来なかったら、町中の子供達のがっかりするでしょう。もちろんトートもがっかりです。ですから、魔女に頼んで雪を降らせてもらおう。そして、みんなで雪のクリスマスをお祝いするんだ！

そう思いながらトートは眠りにつきました。

次の日、トートはベッドから飛び起きてパジャマを脱ぐとクローゼットから自分の服を出して着ました。いつもはおかあさんがやってくれるのですが、全部自分でやったのですよ。朝ご飯を食べると、水汲みのお手伝いをしました。おかあさんがにこにこ

「遊んできてもいいですよ」

って、行ってくれたので、さっそく森へと出かけました。

冬の森は、おかしなかんじです。

夏に来た時は一步入ったとたんひんやりと気持ちがいい風が吹いて、葉っぱが揺れる音や、動物達の足音が聞こえていました。でも今はトートの足音しか聞こえません。秋に降り積もった葉っぱが絨毯みたいにふかふかしていて、道も見えません。どこをどういったら魔女に会えるかしら。そう思いながら歩いていくと、なんだか後ろに誰かがいるような気がしました。おそろおそろ振り向いてみると、そこにいたのはマアでした。トートの家で飼っているシマシマの猫です。「マア」って鳴くからそんな名前が付いたんですよ。きっとトートの後を付いてきてしまったのです。

「だめだよ、マア。ここは寒いんだから」

するとマアは足に擦り寄ってきてぐるぐるとのどを鳴らしました。トートはマアを抱き上げました。背中から日なたのいい匂いがしましたし、マアはとてもあったかかったのでトートはさっきまでの心細さはどこかへ行ってしまいました。

「マアも一緒に魔女のところに行く？」

そう聞くと、マアが、にんまりと笑いました。

トートはあれ？ って思いました。だって、猫が笑うなんておかしいじゃないですか。

「トートはどこに魔女がいるか、わかんないでしょ？ 私が付いて行ってあげる」

って、言ったんです。誰がって？ 猫のマアです。猫が喋るなんて！ トートはびっくりしました。これも魔女のいたずらでしょうか。

「あらあら、猫だって長生きすると喋るようになるものよ？」

そう言ってにっこりと笑ったマアは、トートの腕からするんと抜けて、目の前ですっと後ろ足で立ちました。

「それに、この森の中では猫もカラスもみんな同じ言葉で喋れるようになるの。他の人には内緒よ」

トートはこくつと首を縦に振りました。

「魔女の家はこっち」

そう言ってマアは四本足になると、とことこと先に行ってしまうました。トートはあわててその後を追いかけてました。

どれくらい歩いたでしょう。

少しだったかも知れませんが、遠かったかも知れません。でも今自分がどこにいるのか、トートは判りません。でも道中は退屈しませんでした。だって、マアと一緒にだったんですもの。

「あの木イチゴの林の向こうが魔女の家よ」

そう言われてトゲトゲの向こう側を見ました。たしかに小さな家があります。トートは少し遠回りをして魔女の家の前に来ました。

トートの心臓はどきどきして今にもものどから飛び出てしまいそうです。ああ、やっぱりやめようかしら。いたずらされてソーセージみたいな鼻になったらどうしましょう。

でも、サンタクロースのためです。トートは一回、二回、三回、って、大きく息をして、とんとんって扉をノックしたんです。

すると、

「はあい」

と、元気な声がして、中から女の子が飛び出てきました。黒い服に黒い髪。まるで本当の魔女みたいです。

女の子は、トートを見るとがっかりした顔をしました。

「迷子ならお断り。家にお帰りなさい」

女の子はそう言いながらドアを閉めようとしてました。でもマアがドアの隙間から家の中に入ると入って行ったのです。

「ああ！ マアったら」

女の子はびっくりして家の中に飛び込んで行きました。

「このいたずら猫！」

マアが何かしたのでしょうか。トートも中に入りました。

中はとても大変な状態でした。

本や靴が床に落ちているし歩くと砂でじゃりじゃりと音がします。汚れたお皿はテーブルに高く積まれているし、椅子やソファや帽子かけには服や靴下がぶらさがっているんです。暖炉の中は灰がいっぱいで、申し訳なさそうに火が燃えていました。

その前で、マアが柔らかいクッションの上で丸くなっていました。

「はあ、あったかいわ」

「あたしのよ！ あたしのクッションだわ！」

女の子がキーキー声で怒っても、マアはにんまりと笑うだけ。

「ごめんね。ボクはトート。この子はマアっていうの。君は？」

トートがそう言うと、女の子は、

「リリーよ」

って、答えました。

「それにしてもすごい家ね。こんな散らかった家、初めて見たわ。お片づけしないの？」

すると、リリーはしょんぼりと肩を落としました。

「したわよ。でもすぐに散らかっちゃうの。だって、仕事が忙しいんですもの」

「仕事っていたずらのこと？」

トートが言うと、リリーは怒りました。

「そんなことしてないわよ。いたずらする子のところにはサンタクロースが来ないんでしょう？」

サンタクロース？ トートとマアは顔を見合わせました。

「この前も売れなくて困っているお菓子屋さんのために、お菓子を口を付けたのよ。お菓子の気持ちを判ってくれたらみんな買ってくれるんじゃないかと思ったの。お菓子は食べて欲しくてこの世の中に生まれたのよ」

「そのお菓子はみんなに気味悪がられて捨てられたんだよ」

「そうなの？ どうしてかしら」

すると、マアが口を挟みました。

「じゃあ、物干し竿は？」

「あそこのお家の庭は日当たりが悪くて、奥さんはずっとお洗濯ものに日を当てたがってたわ。だから、物干し竿を大きくしてあげたの。奥さん喜んでくれた？」

「干せなくて泣いていたわ」

「まあ、そうだったの？」

リリーはがっかりした様子でした。

「じゃあ、雪は？」

「毎年雪が降るとみんな困っていたから、今年は雪が降らないようにしたのよ。とても大変な魔法だったけどがんばったわ」

それはそれは得意そうなりりーに、トートは怒りました。

「それは困るよ！ だって、雪が降らないとサンタさんが来ないかも知れないんだよ」

「え！？ そうなの、本当？ どうしよう」

りりーはおろおろと家の中を歩き始めました。あまり困った様子だったので、トートの方が困ってしまいました。するとマアが言いました。

「きっと雪を降らせてくれたらサンタさんも来るよ」

りりーはうん、と、頷いていました。

「わかったわ。じゃあ、やってみる！」

そう言うと、りりーは魔法の杖を懐から取り出して外に出ると、ゆっくりと杖を振りました。

「雪よ雪よ降り積もれ、大地の果てまで白く染め上げよ」

そう言うと、トートには判らない言葉で何かを言い始めました。その声が森中に大きく響き渡ります。

「魔女の呪文だわ」

マアがそう言って空を見上げました。そのとたんひゅうんと冷たい風が吹いて、ひらひらと何かが落ちてきました。

雪です。

白くてふわふわの雪は、天使の羽のように軽くて手のひらに乗せるとひんやりと溶けてしまいました。トートはうれしくなりました。これでサンタクロースは困らないでしょう。するとマアが言いました。

「いくら雪が降っても、散らかっている家にいい子がいるなんてサンタクロースは思わないでしょうね。お部屋を綺麗にしないと」

マアが呟くと、りりーは家の真ん中で杖を一振りしました。

すると、ほうきが一人で動きだし、本が踊りながら本棚に戻っていきます。トートはびっくりしながらも、「すごい！」って、ほうき達と一緒に踊りました。

家の中が綺麗になった頃、外は白い雪の世界になっていました。すると、外で「ホウホウ」というかけ声が聞こえるではありませんか。

「サンタクロースだ！」

見上げると森の木の向こうを空を飛ぶそりが行くではありませんか。

トートとりりーは「うわあい！」って、声を上げました。そりが向かった西の空に日は傾き始め、鈍色の空はだんだんと朱色に染まっていきました。

「さあ。トート。家に帰る時間よ。よい子は暗くなる前に帰っておかあさんのお手伝いをしなくちゃね」

マアが欠伸混じりに言うと、トートは少し考えてから、りりーの手を両手でぎゅっと握って言いました。

「ボク考えたんだけど、ひょっとしてサンタさんはリリーがいることに気が付いてないんじゃないかな。だってこんなに深い森の中なんだもの。だから、今日は家に泊まりにおいでよ。きっと来てくれるから」

リリーはびっくりしました。だって今までお家に招待されたことなんて一度もなかったんですもの。

「いいの？」

と、聞くと、トートとマアは声を揃えて言いました。

「もちろん！」

そうして二人と一匹は、楽しく歌を唄いながら森を出たのです。

家ではおかあさんがトートの帰りを待っていました。

おかあさんはサンタさんに会ったことがない魔女の子リリーの話を知ると、とてもびっくりしてリリーをぎゅっと抱きしめて頬にキスをしました。そして、

「リリーのおかげでにぎやかで楽しいクリスマスになりますよ。二人ともお手伝いしてね」

と、言いました。

リリーもトートも、それに妹のカーサもがんばってお手伝いをしたのですよ。マアは暖炉の側で丸くなっていましたけどね。

その夜のごちそうといたら！

お父さんが狩ってきた山鳥のローストに、豆のスープ。お芋とソーセージのサラダがテーブルいっぱいになっています。おかあさんお得意の木の实とフルーツがたっぷり入ったケーキには雪のようなお砂糖がかかっています。リリーとトートはジンジャークッキーを星形に焼くお手伝いをしました。

夕食はみんなで歌って踊って楽しく過ごしました。トートとカーサが踊って、お父さんとおかあさんが歌を唄いました。お客様のリリーは、魔法を使ってみんなを楽しませてくれました。みんなは初めて見る魔法に目を丸くしましたが、どれも楽しい魔法だったので手を叩いて喜びました。お父さんは、

「クッキーが空を飛んでツリーが家の中を歩き回るクリスマスなんて初めてだ」

って言いながら、がクッキーを空中で捕まえてぱくりと食べたのですよ。

その夜。

おかあさんはトートとカーサのベッドを合わせて、大きな一つのベッドを作って、三人の子供が眠れるようにしました。

「さあさあ、サンタクロースが来る前に寝ましょうね」

本当はトートもカーサもリリーも、もっと起きていたかったのです。だってサンタクロースが来るかも知れないのですもの。でも、起きている子のところにはサンタクロースは来ないので。ですから、おやすみなさいのご挨拶をすると、三人ともぎゅっと目を閉じたのです。

外で鈴の音が鳴る頃には、三人とも夢の中でした。

そして、次の日。

一番先に目を覚ましたのはトートでした。朝が来たことが判るとトートは飛び起きて、暖炉のそばにあるクリスマスツリーを見に行きました。すると、その根元には、ブルーとピンクと黄色の包みがありました。

「うわぁ！ サンタクロースがきたんだ！」

トートはうれしくてその場でぴょんぴょん跳びはねました。そして、すぐにリリーとカーサを起こしました。二人ともサンタクロースの名前を聞くと、ぴょんと飛び起きて、あわててクリスマスツリーを見に行きました。よく見るとその包みには、それぞれ名前が書いてあります。ブルーの包みには「トート」ピンクには「カーサ」そして、黄色の包みには「リリー」と書いてあったのです。

「やっぱりサンタさんはリリーが森の奥にいることを知らなかったんだよ！」

トートが得意げに言いました。

リリーはおそろおそろ黄色の包みを開きました。だって初めてのプレゼントだったのですもの。中から出てきたのは、春色の毛糸で編まれた帽子でした。ぐるっと綺麗な雪の模様が入っているのですよ。

「素敵」

「ボクは新しい手袋だ！」

「あたしはマフラー！」

三人ともうれしそうにお互いのプレゼントを見せ合いました。

リリーはこんなに楽しいクリスマスは初めてだと思いました。

そしてサンタさんはリリーにもう一つ、素敵なプレゼントを用意してくれたんですよ。

それはね、修行の旅に出ていたママが帰ってきたのです。

サンタクロースにリリーの様子を聞いて、いてもたってもいられなくなって帰って来たのだそうです。

ママはトートの家から戻ってきたリリーをぎゅっと抱きしめて、

「ごめんね。もう一人にしないからね」

って言いながら、リリーの黒い髪をゆっくりと撫でたのですよ。

リリーは、サンタクロースとトートにとっても感謝しました。

そして、「いい子でいてよかった」って思ったのだそうです。

あなたの家にも、サンタクロースは来るでしょうか？
もちろん、あなたの家にもやってきますよ。

サンタクロースはいい子のところにしか来ないのでから。

おしまい。

トートとカボチャと森の魔女

秋が来ました。

春や夏も楽しかったけど、トートはこの季節が一番好きです。

だって、石だたみには茶色やオレンジや赤い枯れ葉が落ちてきて、風に吹かれてかさかさと言を立てるし、すこし森の中に行けばおいしい木の実がどっさり採れます。お母さんは、トートがとってきた木の実をたっぷり入れておいしいパイを作ってくれます。

それはもうほっぺたが落ちちゃいそうなのですよ。

今日も、トートは森へ遊びに行こうとしたくをして、

「おかあさん、行ってきます」

ストールをはおりながら手をふりました。でも、おかあさんは困ったかおをしています。いつもなら「行ってらっしゃい」とにこにこするのに、どうしてでしょう。

おかあさんはトートのストールを整えながら言いました。

「今日ね、おばあちゃんのおみまいに行くの。カーサは小さいからいっしょに行くつもりなのよ。でも何時に帰れるかわからないから、トートがおうちで一人お留守番になっちゃうかもしれないの」

トートのおとうさんのおかあさん、つまり、トートのおばあちゃんは、となり町でくらしています。昨日おとうさんが見に行ったら、おばあちゃんはカゼをひいていて、ベッドで一人でねていたんだそうです。トートはパイのことばかり考えていたから、忘れていました。

「じゃあ、ぼくもおみまいに行くよ！」

「わ〜い、お兄ちゃんもいっしょね！」

妹のカーサが足もとにやってきてぴよんぴよんとはねました。おかあさんは、ほっとしてわらいました。

「じゃあ今からいきましよう」

そうして、トートとカーサとおかあさんは、おみやげにおかあさんが作ったパイを持って、おみまいに行きました。

となり町は、とてもにぎやかでした。

もうすぐハロウィーンのお祭りがあるので、あちらこちらにカボチャランタンがあります。あかいのやきいろいのや、ながいのやちいさいのや。たくさんのランタンたちはニタニタと笑っていました。リボンで飾られた屋台もたくさん出ていて、カボチャのスティックパイや、りんごあめ、スコーンの量り売りも売っています。お肉を焼いている屋台から、スパイスの香ばしいにおいがします。トートがおいしそうだなあと見とれていると、おかあさんが、

「帰りに一つだけ買ってあげましようね」

と、約束してくれました。

町はずれに、ぼつんと小さなお家がありました。ここでおばあちゃんは一人で暮らしているんだと思うと、トートはとてもさびしいきもちになりました。扉をノックして、

「こんにちは」

と、おかあさんが入りました。続いてトートも

「おばあちゃん、こんにちは」

と、入りました。部屋の中はひんやりと冷たくて、だんろの火も消えていました。おかあさんはてきぱきとだんろに火をともし、お湯をわかしはじめました。カーサはおかあさんのおてつだいです。トートはおばあちゃんのへやのドアをノックしました。

「おはいり」

中から声がしたので、トートはそっと入りました。

「おばあちゃん、おかあさんのパイをもってきたよ」

するとおばあちゃんは、おおきなまくらにもたれながら、ほほえみました。

「ようきたねえ、もう会えないかと思ったよ」

「どうして？」

「あまりカゼがひどいから、このまま天国に行ってしまうんじゃないかと思ったのさ」

その顔があんまりさびしそうだったので、トートは言いました。

「そんなこと言わないで。おばあちゃん。ぼく、たくさんお話しするから」

それからおばあちゃんとトートはたくさんお話をしました。おかあさんのパイは世界一おいしい話や、森においしい木の実を落とす木があること、そして、お友達のリリーのこと。

リリーは森の奥にすんでいる魔女の子どもです。森の木がたくさんのおいしい実をつけるのは、リリーとおかあさんがお世話をしているからなんですよ。

「いいお友達がいるんだねえ」

おばあちゃんが笑ってくれたので、トートもうれしくなりました。

おかあさんは家の中のことをあらかた片付けると、おばあちゃんとお茶を飲んで、しばらくおしゃべりをして、暗くなる前に家に帰りました。

次の日、朝早くからトートはしたくをすると、リリーの家に行くため、家を出ました。

森の道はとてもきれいな葉っぱに色づけされて、とてもとてもきれいです。赤や黄色や茶色の葉っぱを踏みながら、トートはリリーの家に向かいます。すると、

「まで、カボチャ！」

しげみの向こうから大きな声がしたと思ったら、しげみから大きなオレンジ色のカボチャが飛び出してきました。ぼよんぼよんと音を立てながらね。その後ろからリリーが茂みから飛び出してきました。

「やあ、リリー」

すると、リリーはぴたりと止まってこちらを見ると、顔を真っ赤にして笑いました。

「こんにちは、トート。あとでね！」

リリーは手を振るとまたカボチャを追いかけました。カボチャは高く高く飛び跳ねたり、ごろごろと転がったりして、にげまわります。その時です。森の中にするどい声がこだましました。

「カボチャよ、止まれ」

カボチャはびたりと止まって、そこにごろんと寝ころびました。もう普通のカボチャにしか見えません。こんな事が出来るのは、広い森の中でリリーのおかあさんしかいません。

やっぱりリリーのおかあさんが向こうからやってきました。右手には魔法の杖をもって、左手には大きなバスケットを持っています。

リリーのおかあさんはれっきとした魔女です。しばらく魔女修行で家にいなかったのですが、去年のクリスマスにリリーが心配で帰ってきて、今は親子なかよく森で暮らしているのですよ。

「さあ、リリー、がんばって！」

おかあさんは包丁を取り出すと、リリーにわたしました。

「はい！」

リリーは大きなカボチャに近づいて、カボチャの上の方を切り取り、中身をていねいにくりぬきました。くりぬいた中身はリリーのおかあさんが全部バスケットに入れました。あとでポタージュやクッキーにするそうです。

そしてリリーは目になる三角の穴を二つ作りました。鼻も三角に、口はぎざぎざに。

とても素敵なカボチャランタンになりました。

「できたわ！ 素晴らしい出来よ！」

リリーはとくいげです。トートは町で見たランタンよりも大きくてすばらしいので、とてもかんしんしました。でも大きすぎて、とても運べそうにありません。森の中においておくしかないかしらと思っていると、リリーのおかあさんが杖を一ふりして低い声で呪文を唱えました。するとカボチャはニタニタ笑いながらぴょんっととんで、リリーの家の方へ行ってしまいました。

「あのカボチャ、魔法でくりぬこうとしたら失敗しちゃったのよ」

リリーが恥ずかしそうに言いました。

「魔女もハロウィンのおまつりをするのね」

トートが言うと、リリーが胸を張りました。

「ハロウィンは魔女のおまつりの日でもあるのよ。うろのある木の下でダンスをしたり、ごちそうを食べたり。最後には……」

リリーはそこで話をおしまいにしてしまいました。

「ねえ、最後には？」

トートは気になって仕方ありません。でもリリーは、

「内緒よ」

と、いたずらっぽく笑うだけでおしえてくれません。

「そうだ！ ハロウィンにおうちに遊びに来て！ トートちゃんなら、だいかんげい。うちでパーティをするのよ。おいしいお料理もつくるから、ぜひきてね」

リリーのおかあさんがにっこり笑いました。

「すてき！」

リリーはぴよんぴよんとびました。トートもうれしくて、にっこり笑って、
「はい！」

と、元気よく返事をしました。

家に帰ると、おかあさんとおとうさん、それにカーサとネコのマアにもお話をしました。すると、おかあさんとおとうさんは、顔を見合わせて困ったように言いました。

「あのね。トート。その日はおばあちゃんのおうちに行く予定なの。お祭りの日にひとりにできないでしょう？」

もちろんおばあちゃんのおうちに行くことはうれしいのですが、トートはがっかりしました。魔女のパーティは初めてですし、楽しそうですから。

「わかったよ」

トートはがっかりと肩を落としました。そして、今がクリスマスならいいのにと思いました。いい子にしていたら、サンタクロースはプレゼントになにかいい考えをくれるかもしれませんから。

おとうさんとおかあさんに「おやすみ」のキスをして、ベッドの中で、丸くなっていると、ネコのマアが毛布にもぐってきました。

ハロウィンにマアがいなくても、家族のみんなは「ネコの気まぐれ」ですみませんが、トートがいなかったらおばあちゃんはがっかりするでしょう。でもパーティに行かなかったら、リリーもリリーのおかあさんもがっかりします。

「困っちゃったなあ」

カーテンのすきまから見えるお月さまは、ためいきをつくトートをやさしく照らしてくれました。

次の日、リリーの家に行くと、家のまわりはカボチャランタンでいっぱいになってました。

「トート、いらっしゃい！」

リリーがうれしそうにかけてきました。でも、トートはもじもじとするだけで、言葉が出ません。パーティに行けなくなったことを言えば、きっとリリーはがっかりします。

「すごいでしょ！ おかあさんといっしょに作ったのよ。おきゃくさまはびっくりするわ、きっと！」

「ごめんね、リリー。パーティに行けなくなっちゃったんだ。お祭りの日におばあちゃんの家に行くんだ」

もじもじしながら言うと、リリーはがっかりしたようでしたが、

「しかたないわ。だって、おばあちゃんの方が大事よ。わたしもおじいちゃんとおばあちゃんのためにたくさん準備をしなくちゃ」

と、笑顔で許してくれました。リリーもおじいちゃんとおばあちゃんが訪ねてくるんだと思

うと、ほっとしました。

「それじゃ、トートのおばあちゃんに、おみやげをもって行って」

リリーはそう言うと、家の中に入って、すぐに出てきました。手にはちいさなカボチャランタンをもっています。

「これを、おばあちゃんの家の前に飾って。夜にはろうそくをつけるのよ。わかった!？」

渡してくれた小さなランタンはニタニタとトートを見上げました。中には小さなろうそくが入っていて、火がつくようになっています。

「ありがとう。きっとかざるよ」

そして、今日はハロウィン。

家族でおでかけをするなんて、とても久しぶりです。でもネコのマアは、魔女のパーティに行っていました。

町の中は、ハロウィンのおまつりでとてもにぎわっています。いろいろなかっこうをした子ども達が、家をまわりながらおかしをもらっています。おとなたちも仮面をかぶっていろいろなものを売っています。

トートのおとうさんとおかあさんも、小さな仮面を付けていました。トートとカーサはいちばんいい服を着ているので、あちらこちらの大人がキャンディをくれました。

おばあちゃんの家に着くと、トートはリリーにもらったランタンを玄関に飾りました。

おばあちゃんは、この前とは違ってにこにこしています。

「今日はみんながきてくれて、本当にうれしいよ」

ってね。

それからみんなで、家の中をすっかり片づけると、ささやかなパーティのはじまりです。

おかあさんが作ってきた木の実のパイや、鳥肉のグリル、カボチャのおかしにサラダ。たくさんのごちそうに、トートはうれしくなりました。おばあちゃんがつくった豆のスープもたくさんの具が入っていてすごくおいしくて、あたたまりました。

カードゲームをしたり、おばあちゃんの昔話をきいたりしていると、だんだんお日様は西に傾いていきます。

「ランタンをともしなくちゃ!」

トートはあわてて玄関に急ぎました。後を追いかけてきたおとうさんが、マッチを持ってきてくれました。カボチャで出来た小さなランタンに火をともしると、炎はゆっくりとあたりをてらしはじめました。それはカボチャよりもオレンジ色をしていて、ゆらゆらと揺れていました。

その時です。魔女の森の方向から、なにか光るものが尾を引いてとんできました。一つだけではありません。それは町にある家の数、いえ、人の数よりも多いのです。

「おとうさん、すごいひかりだね」

「どこだい？ ああ、ランタンか。きれいだね」

おとうさんはそう言いながら家に入っていました。どうやらおとうさんには見えてないようです。みまわしてみると、大人はぜんぜん気にしてないようです。

光はあちこちの家に吸い込まれるように入っていきます。赤や黄色、青に緑、紫もあれば、オレンジ色もあります。そして、トートの前にも小さなカボチャランタンの光に誘われるように、ひとつのオレンジ色の光がトートの前に来ると、ぴたりと止まりました。その光はみるみるうちに大きくなり、やがて大人の男の人になりました。その顔に見覚えがあります。おばあちゃんが大事にしている亡くなったおじいちゃんの写真そっくりです。

「おじいちゃん？」

おじいちゃんの光はにっこり笑いながらおじぎをすると、するんとトートの横をすり抜けて、家の中に入りました。夕日のような温かい光は、やがておばあちゃんのそばまで行くと、またおじいちゃんのかたちになりました。その様子に、おかあさんとおとうさんはびっくり。カーサなんて、目を丸くしたままデザートのスプーンを持ってかたまっています。そして、おばあちゃんは、愛おしそうにおじいちゃんに手を伸ばしました。

「ああ、おじいさん」

するとおじいちゃんは柔らかくその手を握って、ほほに優しくキスをしました。

「一人にしてすまないね。でも君はまだ元気でいてほしい。弱気になっちゃいけないよ」

「ええそうですね。あなたのぶんまで生きると約束しましたもの」

ふたりは幸せそうに笑い合いました。

おじいちゃんは、おとうさんとおかあさんに笑いかけました。

「今年は見えているようだ。トニー。リアさん、元気そうで何よりだ」

「お父さん、おひさしぶりです」

「またお会いできてうれしいです」

おとうさんとおかあさんはていねいにおじぎをしました。その横で小さなカーサが首をかしげました。

「おじいちゃんなの？」

カーサはおじいちゃんに会ったことがないのです。いいえ、会ったことはあります。でもうんと小さな時だったので、覚えていないのです。

おかあさんはカーサをだっこして言いました。

「そうですね。ハロウィンは、亡くなった人がこの世にちょっとだけ戻ってこられる日でもあるのよ。そうですね？」

おじいちゃんほうなづいて、ひかる手でカーサの髪をなでました。

「よくお手伝いをして、おかあさんを助けなさい」

カーサはおもいきり「はい！」と返事をしました。そしてトートの方に向いて笑いました。

「会えてよかったよ、トート。小さな魔女さんによくお礼を」

おじいちゃんと話すのは久しぶりなので、トートはどきどきしながら「はい」とへんじをしました。

「おまえ、また来るよ。来年も、再来年も」

おじいちゃんは、もういちどおばあちゃんにキスをして、また光になって家を出て行きました。

不思議な不思議なことでした。

トートもおとうさんもおかあさんもカーサもおばあちゃんも少しだけ泣いて、最後に笑いました。

だって、おじいちゃんが来年もその次もまたその次も会いに来てくれるなんて、とてもすてきなことだと思ったんですよ。

その夜、リリーがトートの部屋の窓をたたきました。

「おかしをくれないと、いたずらするよ？」

トートはパジャマで起きて、いそいで窓を開けました。

「リリー。今日はありがとう。おじいちゃんに会えたよ。おじいちゃんもありがとうって言ったよ！ これ、おみやげ」

町でみつけたかわいいキャンディをリリーにあげると、うれしそうに笑いました。

「ありがとう！ 私もたくさんのおじいちゃまやおばあちゃまに会えたのよ。それでね、帰る前にトートに会いたいんだって。早く早く！」

リリーは窓の外からトートの腕を引っ張りました。

「でも、おかあさんがもうすぐ見に来るんだ。行けないよ」

「それじゃあ！」

リリーはもらったキャンディに杖をしゅるんと振りしました。すると、トートがもう一人現れました。トートはびっくり。

「この子が戻ってくるまでトートのまねをしてくれるわ。さあ行きましょう」

トートはくつをはくと、こっそり窓から出ました。

外はとても寒くて、口から湯気がぽっぽと出ました。かさかさとしゅるしゅる音をたてながら、リリーに手を引かれながらまっ暗な森の中を走ります。でもそれはしばらくのことで、向こうの方でカボチャのランタンがにんまりと笑うのです。よく見れば、道の両側にずらりとカボチャランタンが並んでいるんですよ。あたたかな光を見るだけで、体の中まで温かくなるようでした。

リリーの家の前の広場には、テーブルが出ていて、沢山の透き通った人たちが飲んだり食べたりしていました。たくさんのカボチャランタンがやっぱりあたりを温かく照らしていて、きらきら星のようなかがりが、木々をいろどっていました。

「こんばんは」

透き通った人たちにいていねいにあいさつをすると、一人がするりととんで、トートの前に現れました。するとテーブルにいた透き通った人たちも集まってきました。そして、一番おひげの長いおじいさんが、言いました。

「こんばんは。トートくん。いつもリリーと遊んでくれてありがとう。トートくんは幸福がたくさん訪れますように」

そう言って、杖を振りました。きらきら光る粉のようなものが、トートの体にふってきました。

「さあさ、もう帰る時間ですよ。あなた方が最後です。急いでください。ハロウィーンが終わってしまいますよ」

後ろで誰か男の人が叫んでいます。それを聞いたリリーが走りました。透き通った人たちもするんととんで、リリーを追いかけるので、トートも追いかけてきました。

そこには、光る扉がついた大きなうろのある木があって、そのそばでリリーのおかあさんが立っていました。透き通った人たちは、一人一人リリーとリリーのおかあさんに握手をして、その中に入っていきます。

最後に、扉の中から黒服の紳士がでてきて、きょろきょろと見回しました。

「もう誰もいませんね」

というと、紳士はリリーとリリーのおかあさんに急いでキスをしました。そして、トートの方を見てにっこり笑って手をふりながら、扉を内側からぱたんとしめました。

同時に光る扉はなくなり、あたりはとても静かになりました。カボチャのランタンはあいかわらずにんまりと笑っていましたが。

どこにいたのか、猫のマアがトートの足にすり寄ってきました。

「ねえ、今の人、誰？」

リリーに聞くと、リリーは幸せそうな顔をして、

「内緒よ」

と、ウインクしました。

でもトートにはもうわかっています。きっとあれはリリーのお父さん。

「そうでしょう？」

と、マアに聞くと、マアは「にゃあ」と鳴いて、顔をくるくると撫でました。